

良寛の新「夜讀永平錄」

光 地 英 學

題目に新としたのは、世間未發表のものと思われるからに他ならない。しかし夜の字を冠しないで、單に「讀永平錄」と題したものは、他にわたくしの現在まで接した範圍では、次の五種がある。すなわち東郷豐治氏「良寛全集」に二種(本文と、その下に註をして、本文と相違している他の一種の相違點を擧げてゐる、都合二種)、玉木禮吉氏、大島花束氏「良寛全集」に一種(玉木、大島各氏のそれぞれの良寛全集所載のものは同一であり、東郷氏の下註の一種とよく似てゐる)、相馬昌治氏「良寛和尚遺墨集」に一種、近熊治郎氏所藏のもの(近熊氏は新潟縣新發田市在住、同氏は以前所藏していたが、現在は同氏の手を離れて他に移り、その所藏主は不明。これは原田勘平氏の原文書寫のものに據る。なおこれのみ無題)一種、以上の五種である。

次に「夜讀永平錄」の全文を左に掲げてみる。
蒼茫草庵夜。寒雨灑杉竹。欲慰寂寥良無由。暗裏摸索永平錄。幽窓下書案上。燒香點燈正拜讀。身心脫落唯一實。千態萬狀龍弄玉。出格機過今日。老大風像乾竺。憶得曠昔在圓通時。參去參來窮己躬。其時忽然有所省。得謂逸鶴凌蒼穹。經事漸覺有罣碍。更莫三精朝。春又冬。不到實地誓不休。大丈夫兒豈止勞。中秋八月三五夜。先師開示正法眼。我亦從衆偕聽者。始知從來破自滿。自茲辭師遠往返。我與永平何因緣。到處奉行正法眼。從爾以降知幾歲。罷參歸來住疎懶。今把此錄靜商量。迥與諸方調不混。五百年來委埃塵。玉石無入辨。無入辨職由。是無擇法眼。滔々皆是與誰論。懷古感今勞心曲。一夜燈前淚不留。濕盡永平古佛錄。翌日有來人來草庵。問吾此書如何濕。低頭良久有一語。夜來雨屋漏濕書笈。(原文には句點返點はない)

右の現在所藏者は、須垣久作氏(富山市本郷新在住)である。次に、この「夜讀永平錄」(以下須垣文と略稱する)の眞筆性を、三つの點から立證したいと思う。

(1) 現存の良寛研究の權威者、原田勘平氏、須垣久作氏により、良寛の眞筆であることが斷定され、原田氏によつてこの良寛の詩文が箱書されている。如上の兩氏についてみるに、原田氏(新潟縣中頸城郡分水町中島に在住)の三代前の祖先是、醫師で原田鶴濟といひ、良寛の親友であり、現勘平氏は、現代良寛研究の第一線級の人である。須垣氏は多年に渉る良寛筆墨の蒐集研究者として、斯道愛好者間に著名な人である。

(2) 書體は、唐僧懷素の草書に直參し、しかもこれを超えた風格のにじみ出ている草書體である。まことに一點一劃が少しも法則を亂さず、それでいて自由かつ自然、少しも氣どつたところがない。

(3) 文體と同一詩文に屬するものが幾種類もある、という面を考えてみる。文體については、良寛の詩文の特徴は、平仄や韻にとらわれず、いわゆる唐以前の古詩に類するものである。また同一趣旨の詩文が幾種類もあるものは、良寛が己が心中の興趣を吟じ、天衣無縫に感懷を詠じ出したのであつて、必ずしも一定のものを模守した

のではなかつた。あえて世に伝える意志もなく、ただ手に任せて運筆したから、詩文であつてしかもその形式を超越し、同一事を詠じたものでも文字の異同をみる、すなわち幾種類ものものが現われるに至つた。これは單に讀永平錄にのみい得ることではなく、廣く良寛和尚の遺蹟全般について斷じ得ることである。このこともまた前の(2)と共に、むしろ良寛の眞筆性を側面的に立證するものとなし得るであらう。

それでは當「夜讀永平錄」を、他の同一趣旨の詩文と比較してみた場合はどうか。わずかの相違は割愛して、以下著しい箇所のみを擧げること止めたい。

(1) 題目に夜の字があるが、他のものにはない。さらに近熊氏の所藏していた詩文(以下近熊文と略稱)は、前述の如く無題である。

(2) 「蒼茫草庵夜」近熊文は、春夜茫々二三更、他の詩文はいずれも、春夜蒼茫二三更となつてゐる。

(3) 「寒雨灑杉竹」近熊文は、春雨爲雪灑庭竹、他はいずれも、春雨和雪灑庭竹である。

(4) 「幽穿下書案上」東郷氏全集(以下東郷文と略稱、他も同様にそれぞれ略稱)の本文にない。玉木・大島文、相馬、近熊文、及び東郷文の下註はいずれも、明窓下分几案頭となつてゐる。(但し、相馬文、近熊文、東郷文の下註には、今の字はない)

(5) 「得」謂逸鶴凌蒼穹、「更莫精朝春又冬」、「不到實地誓不休」、「大丈夫兒豈止勞」、「中秋八月三五夜」、「我亦從衆倍聽者」以上の六句は、他のいずれにもない。

(6) 「始知從來破自滿」東郷文は始覺從前漫費力、東郷文下註ならびに玉木文、大島文は、轉覺從前獨用力、相馬文は、轉覺從獨

用力である。近熊文にはない。

上掲以外の部分は、他と概ね同じ。全體的にみた場合、相馬文に比較的類似している。

それでは次に、單に須垣文に限らないで同種の各文を通じ、その内容からみた場合、この詩文の價值はどうであるか。

ほとんど周知の如く良寛は、備中玉島(岡山縣玉島市玉島)圓通寺の國仙師が越後參訪の折、同師に従つて圓通寺に趣き出家、大愚良寛と號して修行に専念、遂に悟道の域に達して師國仙より印可證明されてゐる。爾後、國仙没後寛政九年(一七九七)頃まで、約廿年間同寺に留錫していた。その間、國仙より永平正法眼藏の提唱を受け、その精神を體認した。以後、正法眼藏を身邊から離すことなく珍重奉持していたものである。眼藏私淑の感激と、同書の世に知られていないことの悲歎との一俱になつてゐるのが、他ならぬこの詩偈であるとなし得る。良寛その人の眞骨頂と、その精神基盤を開示しているのが、この詩文であるから、數ある良寛の遺墨中、當文の占める内容價值は高く評價されてよいものと思われる。

最後に、これら各種のうちにおける須垣文の位置に觸れる。須垣文すなわち「夜讀永平錄」は、同種の詩文中、他と比較して最長の詩偈であり、最も委曲を盡くした感がある。従つて内容の最も充實している點は高く評價されてよい。この意味から、同種のもののうち、最後にできたものと考えるのが妥當のように思われる。